
7回目の転生～初めての女の子～

里山隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7回目の転生〜初めての女の子〜

【Nコード】

N4445Y

【作者名】

里山隼

【あらすじ】

機械音痴の天使の操作ミスのせいで死んでしまった福田優^{ふくだ ゆう}は、神様に「世界を創造することができる天使」になるための方法を聞き、この目標をかなえるために100回転生することになった。1〜6回目までの転生を終えた優の7回目は、なんと女の子だった。はたして初めての女の子の人生はどうなるのか？

プロローグ〜6回目の転生最後〜

「カァーカァー」

あゝ飛べるっていいよな。目的地に着くまで曲がらなくていいのを初めて体感したときは、感動して1日中そこから辺飛び回って、最後にはおちそうになたな。懐かしい。まあ思い出に浸るのはこのくらいにしておいて。

さあ今日も、食料探しに行こつと。今日は、何を探そうかな。…くるみは昨日食べた、肉は一昨日食べたから…。…オレンジの皮！そうだ！オレンジの皮探そう！オレンジ系は、三丁目に住んでる板倉一家がよく食べてたなんじゃ今からごみ箱あさりにいくか！！

……バサツ……バサツツ……バサツ……

「カァー！（ごみ捨て場発見！）」

……ゴソゴソ……ゴソ……ゴソゴソ……

「カァ〜〜〜〜（発見！）」

……モグモグ……モグモグモグモグ……モグモグ……

「カァああああ〜〜〜〜（美味〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜）」

今日のオレンジも美味しいな。愛媛産かな？

つーか板倉一家って毎回毎回1人4〜6個ぐらいたべてるな…。こんなに皮が余るならいつそマーマレドでも作ればいいのにな。まあオレが食べるから残してくれた方がありがたいけどな。

んっっ？何か眠くなってきたな？……今日は……2時間ぐら
い前に起きたばっ……かだから眠く……ならないは……ずな……の
……に……どうして……だ……

プロローグ？～天界～

「……………」

ん？ここは天界か？

あれか、好物食べてる間に毒殺されたのか……………

まあオレが最初に地球で死んでからもう50年たって、カラスはだいたい5倍くらいの数に増えてたから、市長がついにカラス対策を始めたってことか。でもカラスって頭いいから今頃ノリ・カナ・ケンあたりが俺が死んだことに気がついてどうにかしてんだろうな。まあもう俺死んだから関係ないけど。

そういえば、今までの経験からするとそろそろあいつが来るはず……………。

「久しぶり～ 今回の人生は、どうだった？」

「よつ。カラスもいろいろ大変だったことが、よくわかった。人間だったころは、ウゼ～、としか思わなかったけど、もうゴミあさりしないし食べ物ほとんど手に入らないってことがよく分かってよかった。」

「そつか～。んじゃ取りあえずいつも通りに転生ダーツしよっか」

「早いな。まあ了解。」

は？、でもオレ、転生ダーツ——3回のダーツで次の転生先・種族・能力を決めること——嫌いなんだよな～。今まで、ホチキスとか木とかもひいたことあるしな……………

まゝ取りあえず投げるか！！

シュッー

シュッー

シュッー

結果は、どうなんだ？

「おゝゝ！！すごいね。今回はすごくいい人生だよ。きつと。」

「ん？どうゆうことだ？」

「転生先は、険と魔法の世界、レイセントラス。種族は、人間。能力は、無限魔力・言語理解・記憶力増加よ。天使からみても、こんな人生はなかなかお目にかかれないわ。元はと言えば、わたしの機械操作ミスのおかげでこんな生活にさせることになっちゃてるから、罪ほろぼしをした気分だわ。」

「マジか！！7回目にしてやっと人間界か。そうと決まれば、さっそくその世界に送ってくれ。あっそうそう今回も人格が今の俺のままでいられるようにすんの忘れんなよ。」

「了解了解わかってるってば。では、7回目の転生生活に、いつてらっしゃい。」

「おつ。」「

「あつ！！間に合わなかった。」

「ん？神様、今更何をしにきたんですか？彼なら今さっき逝きましたけど、どうしたんですか？」

「あいつの次の人生は、初めての女の子なんだ……。伝え忘れた。」

「……。マジですか。彼のこれからの人生はどなるのでしょうか……」

「……」

第一章：登場人物（前書き）

人が増えたら、更新します。

第一章：登場人物

・アレフティナ＝リリ＝メルヴェル（主人公）

0歳：銀髪赤眼：元男の子、現在7回目の転生中。

・エディ＝ジヨセフ＝メルヴェル

30歳：金髪赤眼：宰相補佐官。武官を目指していたけど、ルイズと試合をして負けてから、得意だった書類整理や、翻訳ができる、文官になった。かなりの切れ者、家族には甘い。

・ルイズ＝マリア＝メルヴェル

29歳：銀髪蒼眼：最強女性騎士。王立騎士団女性部隊隊長&王立騎士団副隊長、見た目の割には、大雑把。

・アルフォンス＝クルス＝メルヴェル

7歳：銀髪蒼眼：長男。二卵性双生児。魔力が強い。将来の夢は王立魔道具研究室にはいること。

・アンネット＝ピアンカ＝メルヴェル

7歳：金髪蒼眼：長女。二卵性双生児。料理が大好きな、超合理的主義者。将来の夢は、女性初の宰相。

・アイラⅡエイニオ

22歳：赤髪緑眼：アレフティナⅡリリⅡメルヴェル専属侍女。時に厳しく、時に優しくが座右の銘。裏表有り。時

誕生&命名

「おぎや〜〜、おぎや〜〜〜〜〜〜、おぎや〜〜〜〜〜〜」
あ〜〜〜〜、人のおなかの中から出るのって、苦しいんだな。
高校のマラソン大会で、30km走った時よりもたいへんだったな
！。

「元気なお子さんですよ。」

ん？医者か？

そういえば、現世での両親ってどんな人達だろう？

「ルイズ、お疲れ様。さっそくだけど、この娘の名前をどうする
？」

おっつ。今から俺の名前が決まるぞ。
てか、俺のお父さんカッコいいな。身長は、180cmぐらいか
？しかもめっちゃ外人オーラ出てんな。なんてゆゝか、金髪赤眼
？イケメンさん？

「ええ、私はこの娘にアレフティナという名をつけたいです。」

うわっ！お母さんすごくきれい。めっちゃ美人！銀髪蒼眼で顔めっちゃめっちゃ整ってますね。こんな綺麗でカッコいい人たちの息子に生まれてよかった。

「いい名前だな。さすがは、ルーズ。でも私もこの娘にリリという名をつけたいから、この娘の名前をアレフティナ＝リリにしよう。」

「とても良い名前ですね。ではこの娘に挨拶をしなければいけませんね。」

「そうだな。」

ん？2人がこっち向いたぞ。

「こんにちは、私たちの元に生まれて来てくれてありがとうございます。君の名前は、アレフティナ＝リリ＝メルヴェル。これからは、メルヴェル侯爵家の娘として、大変な事もたくさんあると思うが、必ず君をまもるよ。」

「こんにちは、私はあなたのお母さんよ。エディと一緒にあなたを必ず守るから、安心してね。」

誕生日前日の願い

~~~~5年後~~~~

早く明日の私のお誕生日にならないかしら？

.....キモッツ!!

語尾にハートつけるとかキモッツ!!

世の中の女の子がかわいい感じに話せる理由が本気で分からない!

ちなみに、これは、今までの転生生活の中で一番の疑問だ。

俺も、そのうち使えるようにならなくちゃいけないのか.....。

今は、話し方を少し丁寧にするだけで、他の人は、元気で活発な女の子だと思ってくれるからいいけど、クルス兄とかアリア姉ぐらいの歳になったら、社交界デビューとかもあるから、かわいい女の子の話し方を習得しなくちゃいけない.....。

まあ、今はこの問題を放置しておこう。

とりあえず、今は早く明日になることを願おう。

メルヴェル家は5歳になるまで、魔法どころかマナーレッスンさえ

してもらえない。

それは、メルヴェル家初代侯爵（今は亡き俺のじいちゃん）が、メルヴェル家の3大家訓に【子供には、5歳まで俗世のことを教えてはいけない】というものをいれたからだ。

なんでも、俺のじいちゃんは、先代皇帝の双子の弟として、2歳から勉強をさせられ、自由な時間がなく、侍女に起きてから寝るまで監視される、という生活の苦痛さを大人になり侯爵の地位をもらってからも、ずっと忘れることができず、自分の子孫には、あんな苦痛生活はさせない！といってこの家訓を創つたらしいと、母さんに聞いた。（ちなみに父さんは、婿養子）

ってなわけで、俺は、今まで全く勉強できなかった。

まあ3歳までは、立つ練習とか口から声をハッキリだす練習とかで、毎日することがあったからよかったし、4歳までの1年間は勉強しなくていいなんてラッキーとしか考えていなかった。でもこの1年間は違う。子供向けの絵本を読んだり、クルス兄とビアンカ姉が暇なときに一緒に遊んでもらうことしかできない今の生活が、ハッキリ言ってつまらなかった。

しかも、基本的な文字の読み書きしかできないから、俺は日付や時間を読むことができない（転生ダーツで引き当てた言語理解の能力の対象に、なぜか数字や日付が入ってなかった）。そのため日本にいたときのように、何時に何々をする、つというような予定が全く立てられなかったり、何かに集中しているときに飯になったり何かの予定の時間になっていたりして、元日本人としては割とストレスがたまりやすい日々だった。

だから明日5歳になって、明後日から勉強できるということがもの

すごく嬉しい。

父さん曰く、明後日から3人の先生が来て、マナーレッスン・今住んでる国の常識・魔術、を教えてくれるらしい。

とりあえず今は一刻も早く明日になって欲しい。

ガチで。



誕生日〜午前中〜

「……………様……………さ。」

……………誰？

「テイナ様、起きてください。本日の午前中に、奥様とお買物へ行く事をお忘れですか？」

！……………！

「ヤバっっ！！」

違う！！

「すっかり忘れていました。教えてくれてありがとう、アイラ」

これが、俺の女の子バージョン。……………うん、下手だね。もっとうまく……………上手にできるように練習しよう。

っじゃなくて。

今日の午前中は、母さんと一緒にお買物にいくんだった。アイラ、俺付きの侍女として教えてくれたのはうれしいし、立派だと思う。けどさ、俺を起こしたあと俺の着替えの準備するのはやめて。アイラは、優しいから好きだけど、やっぱり着替えは一人がいい。女の人に下着姿を見られるのは、やっぱり恥ずかしい。

あゝあ、楽しそうに服を持ってきたよ。

今日は、俺が寝坊したのが悪かった。明日からは、アイラがくる前に起きる。あきらめて着替えさせてもらおう。

うん!! やっぱり恥ずかしかった。やっぱり着替えは自分でするものだよな。

「ティナ様、これから食堂に行ってください。奥様が久しぶりに、家族そろっての朝食を、心待ちにしております。」

うわー、アイラかなり満足したみたいだな。なんか複雑な気分。

「めし…朝食ですね。了か…わかりました。すぐに行きます。」

やっぱり、いろんな人生6回とも全部が男だと、なかなか口調直らないよな!!

取りあえず、今は、ご飯。

「父さま、母さま、クルス兄さま、ピアンカ姉さま、おはよう。」

「おはよう。今日一緒に行く店は、私のお気に入りの店だから、期待してね。」

「おはようティナ。午後の誕生会では、ティナがびっくりするような、プレゼントがあるから、楽しみにまってる。きっと誰のプレゼントよりもいいものだぞ。」

「ティナ、お誕生日おめでとう。」

「お誕生日おめでとう。今日の、私からのプレゼント期待してね。」

上から母・父・兄・姉からの、朝の挨拶の返事である。

「ご飯を食べ、家族みんなと話し、しばし団欒……」

1時間(?)後

「じゃあ、ティナそろそろ行きましょう。」

「はい、母さま。」

あれ？

「母さま、クルス兄さまとピアンカ姉さまは、いかないんですか？」

「今日は、ティナと私、二人だけよ。嫌だった？」

「母さまを独り占めできるのは、うれしいです。」

「では、行きましょう。ティナ。」

「はい、母さま」

やったね。母さんと二人だ、なんだかんだ言っただけで今までの人生、あんまり両親とか家族構成に恵まれなかつたうえに、クルス兄とピアンカ姉がいたから、母さんと二人で買物するのは、初めてだから、うれしい。クルス兄とピアンカ姉は、大好きだけど、母さんはもっと好き。

そういえば、

「母さま、これから何を買いに行くんですか？」

何買うんだろう、今までは全部、父さんや母さんが買ってきてくれたから、自分で何か選んだ事がない。

「ドレスと装飾品よ。ドレスは、もう注文してあるから取りに行くだけだけど、ネックレスとかは、自分で選ばせてあげようと思って。5歳になったから、そろそろ自分でつけたいもの、つけたくないものがあるでしょう？」

「.....。はい？」

.....来た！！ついに来てしまった！！

今まで自分から女の子用の装備を考えないようにしてたのに!!!  
ハハっっ!!!だから今まで自分の姿を見ないようにしてたのに!!!

…まじショック……………

「ティナ？着いたわよ。早く降りなさい」

「はい。」

ショックを受けている間にいつの間にか着いたらしい。

来た、今まで入った事がない女の子のお店!!!外装からしていかにも女の子。って感じた。

心の奥底からない。

——チリンチリン

……ピンク~~~~~~~~!!!

予想はしてたけどこれはきつい!!!ガチでない。母さんには悪いけど、俺は、この店が苦手だ〜。

絶対無理

結果的に言うと、買物楽しかった。

なんかごめん。

内装と外装が気に入らないのは今もだけど、洋服選びは違う。ものすごく楽しい。

いや〜。初めて自分の姿を鏡で見たんだけど、可愛かった。鏡で見た俺が、あんなに可愛いとは思わなかった。可愛い子の装備品考えるのがめっちゃ、あんなに楽しいとは……………。これで、一歩女の子に近づけたと思う（多分）。自分に似合う髪飾りひとつ探すのに、絶対30分は使った。買物は神！！楽しい！！これから絶対この店通う。

んでもって今日から、俺の目標に、

【絶対ナルシストにならない】

が、おめでたいことに追加されました。拍手~~~~。

.....誕生日なのに最悪.....

.....。

誕生日は午後？

—— 夕刻

カチャ——

よしっ！！ブレスレットもした。昼間母さまに買ってもらったピンクのドレスも来た。アイラが結ってくれた髪もずれてない。男の俺目線から見てもかわっっ………キモくない！！！！いつだれが呼びに来てても問題なし。

「ティナ様、パーティーの準備ができました。場所は大広間です。」  
「りよ……わかりました。今行く……ます。」

……まあこの世界来て5年だから言葉づかいはまだ下手でもいいよな。問題ないよな。ハハハハハ………  
地味にシヨック。とりあえず大広間にいこっ……

ギギギ—— パタン

「『ティナ様、お誕生日おめでとっっ（うれいませ）』」



「父さま、母さま、ピアノ力姉さま、クルス兄さま、皆、ありがとう。大好き。」  
うん、皆が祝ってくれたから。さっきの言葉遣いの間違いか、午前中に発覚したナルシスト疑惑とかどうでもよくなってきたわ。おっ、料理長が前に出てきたぞ。

「今回のケーキは、チョコレートケーキでございます。」

マジか……。きたー！ー！早く家族がいるところに行つてメルヴェル家の誕生日恒例のケーキカッティングをせねば。ちなみに誕生日ケーキのカッティングは、誕生日の人から順に、食べたい量を切ることができるんだ。今日は俺の誕生日だから俺から切れる。しかも俺の大好きなチョコケーキ。マジ嬉しい。

とととととと……ボムっ

「ティナ、ドレスのまま走ったら転んでしまうよ。」

「父さま。だってチョコケーキがあつちにあるんだ…よ。」

「大丈夫、チョコケーキは逃げないから歩こうね。」

ぎゅ

父さんに、手を握られたら走れない。俺のチョコケーキまで後5mもあるのに。父さんひどい。

「さあ、ティナ切つていいよ。っとその前に布をはがさないかね。」

「うん」

——スッ

うわああ出てきたー！。綺麗にチョコでコーティングされてて、大きさが一辺1mの正方形。下に固めのパイ生地？かクッキー？っぽいのがあって、上は、ベリー系・オレンジ系・コーヒータ粉？がかかっているとこの3つにわかれている。どこも美味そうだ。

「ティナ、どこ切るか決まった？」

「はい、クルスに兄さま。」

俺はまっすぐオレンジのところに行き、その部分を20×20くらいに切った。

「さすがティナ。ここぞとばかりにオレンジばかり。さすが。」

「兄さまだっていつもベリーのしか食べないじゃん。」

「むっ。」

「どつちも一種類しか食べないんだからいいじゃない。」

「「ピアノカ（姉さま）は、コーヒータしか食べないんだから、上から目線で言うな。」」

まあ楽しい（？）兄弟談話中に両親がケーキを切り終わったので、談話をやめた姉さん達がケーキを切りに行き、その後は使用人たちなので、皆がどんどん切っけていき、最後の1人まで切り終わった。

「ティナ、全員切り終わったみたいだから、よろしく」

「はい。母さま。では、森の恵みに感謝します。いただきます。」

「『いただきます。』」

「「「「やっぱり、（オレンジ・ベリー・コーヒー）が一番おいしい  
！」「」」」

……………っあ、兄さま・姉さまと目があつた。

じ———

「あなたたち本当にそっくりね。」

……………っん———

「「「「似てないよ（わ）！……」」」」

誕生日〜午後?〜(後書き)

用事があって投稿できませんでした。ごめんなさい。

誕生日〜午後？〜

パクパクパクパク

ん〜さつき食べたケーキも美味しかったけど、今食べてるチキンも美味いわ。さすが俺ん家の料理人達。たまに前世で見たことがなかった食べ物が出てくるけど、基本的には全部おいしい料理になって出てくるから何でもいいや。

「ティナ。」

「何ですか。おやJ:父さま。」

よしっぎりぎり違和感はなかった。……訳ないよな。今までのくせって抜けないよな。

「おや?」

「なんでもありません。父さま。それでどうしてここに来たんですか。」

「さつき全員がティナに渡す誕生日プレゼントの準備が終わったから呼びに来たんだよ。」

「ほんとですか。今行きます。」

「ん。それじゃ向こうに行こうか。」

「はい。」

よし！何とかごまかせてた。良かった。それにしても皆からのプレゼントか。どんなのがあるんだろう？

「ティナ。最初に渡すのは私よ。（ゴソゴソ）はい、これ。中身は私が今つけているネックレスの色違いよ。必ずつけてね。」

「はい。ありがとうピアンカ姉さま。……ずっとずっと大切に使います。」

そうか、ありがとっただけじゃだめだったか。ジーと見られてた時は、ちよっとな怖かった。

「ティナ、次は僕からだよ。はい。ぼくが作った魔道具だよ。真ん中についてる宝石に触れると光ったりきえたりするんだ。」

「すごい。さすがクルス兄さま。大好き。」

わー、ガチですげークルス兄。あれじゃん懐中電灯。しかも魔法で作られてるから魔術式さえ壊れなかったら、永遠に使える優れもの。クルス兄にくつついてる俺を見るピアンカ姉の視線とピアンカ姉に対するクルス兄の勝ち誇った目線が少し怖いけどまあいいや。放置放置。

「ティナ、私からこれよ。」

「わー綺麗。」

すごい、母さんからの誕プレはシンプルだけど繊細な彫刻がところどころに散りばめである、短剣だ。

「明日から、マナー・知識・魔術の先生がきてそれぞれの事について教えてくれるから、私はその間の時間に関心を守るための武術を教えます。大変だと思っけど手加減しないから頑張って。」

「……はい。」

母さんの一言で喜んでいいのか全く分かんなくなってしまった。つかなんか明日になって欲しくなくなった。うん、怖い。

「ティナ、マリアはいじめたくてやってるんじゃないんだから怖い顔をするんじゃないよ。まあ、私も騎士団に所属していたころアリアに負けてしまったことがあるから大丈夫だよ。」

「……………」

父さん、なかなか怖いこと言うな。なぜか冷や汗止まらなくなったじゃないか。

「それはおいといて、私からのプレゼントは物じゃないよ。でもティナはとっても喜ぶと思うよ。」

「?」

「じゃあここにある水晶に手をかざしてごらん。」

「?。はい。」

ぱああああ

「えっ」

俺が水晶に手をかざしたとたん、俺の身体の周りに半透明の霧のようなものが現れ、目の前で父さんがそれに光を当てている。父さんから出ている光が消えたと同時に霧も消えてしまった。

「父さま。今のは?」

「さっきのは、ティナから出ている魔力だよ。私は、魔法判定士の資格を持っているからティナの魔法の種類を判定したんだよ。」

「すごい、それで私の魔法の種類は何?」

「それは、明日の魔術の授業まで秘密。」  
「ひどい。父さま意地悪。」

父さん、今だけ大嫌い。ない。マジでない。

「あなた、ティナの魔力とか種類はいつたいどれくらいだったんですか？」

「ああ。マリア聞いてもあまり驚かないでくれ。ティナの魔力は多分限界がないうえに、特にこれといった種類はなかった。」

「種類がない？それは、ありえませんが人は魔力がなくても必ず所属がある……。まさか……。」

「そうだ、多分あの子は、すべての種族……つまり魔術創造の力を持っている。」

「でも……。魔術創造の力は、」

「そうだ。あの力は最強だけれど、利用されやすく他人に狙われやすい力だ。とりあえず明日ティナには、光・水・風の力を持っていることだけを伝えて、本当のことは、10歳になったら教えるつもりでいる。」

「そうですね。そのほうがいい。私たちであの子をしつかり守らなければ。ティナは……。」

「そうだな。とりあえず今日はもう寝よう。気にしすぎてもいけない事だからな。」

「そうですね。」





誕生日〜午後?〜(後書き)

いろいろなところを少しずつ編集しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4445y/>

---

7回目の転生～初めての女の子～

2011年12月11日01時50分発行